実施報告書

◆ 基礎情報

計画名	**mottainaiプロジェクト2025 ～福井三里浜オリーブと持続的な地域創生～**
実施責任者	国際学部　田中（坂部）有佳子
対象者	国際学部国際学科田中坂部ゼミ11名／「国際協力とNPO」履修生
実施期間	2025年4月～2026年1月

◆ 取組み概要

　福井市三里浜オリーブカルメリーナで育つオリーブを持続可能な食資源として捉え、その魅力発信を促進することによって、地域創生の一端を担うことを目指す。三里浜オリーブカルメリーナは、観光農園としての発展に向け、オリーブ木の生育とオリーブの加工品生産を行っている。ここの課題のひとつは農業における人手不足と県外に向けた魅力発信である点が、2024年度の訪問にて明らかとなった。そこで、三里浜オリーブがもつ価値とオリーブオイルをはじめとする加工品の魅力を分析し、魅力を確実に県外の消費者に届ける方法を模索し、それを実践することをプロジェクトの活動とする。
　本プロジェクトでは、国際学部田中（坂部）ゼミの国際卒業演習の4名と国際専門演習の5名を中心として、１）三里浜オリーブとその加工品がもつ価値の分析と販売促進、２）食資源としての魅力発信の分析と提案、３）研修会および収穫祭イベントの企画と実践、４）魅力発信のためのSNSの開設と運用を行った。教員は学生たちのリーダーシップ発揮のもと主体的な協働活動につながるようオリーブカルメリーナや福井市関係者といった外部との連携支援を行い、同時に卒業研究として結実できるようなプロセス形成ならびに分析・執筆指導を担った。

◆ 取組み全体の流れ

4月　三里浜オリーブとその加工品がもつ価値の分析／ 商品紹介（オリーブオイル等）パンフレット作成
5月　福井イベント（商品販売促進）の参加、アンケート調査の実施（高輪ゲートウェイ）
6月　食資源としての魅力発信の方法検討
　　研修会企画、観光ツアー企画、食資源に関する文献収集
7月　インスタグラム「kyoritsu_olive」開設と運用開始
8月　研修会および収穫祭イベントの準備
9月　研修会実施、アンケート調査の実施
10月 収穫祭イベント支援
11月-12月　パンフレット、ゆるキャラ案作成（3年生）、卒業研究としての仕上げ（4年生）、
　　能登地域創生のワークショップ（国際協力とNPO履修生対象）
1月　次年度個別テーマ検討会、SNS運用ワークショップ（3年生）、卒業研究最終報告会（4年生）

◆ 取組みの成果

・ポップ、パンフレットの作成（右図参照）
・高輪ゲートウェイ駅「福井市マルシェ」販売活動
・SNSの立ち上げと運用（右QRコード参照）
・研修会（2泊3日）の企画と実施
・収穫祭イベントでの企画と実施
　商品促進販売、研究成果発表、食のビンゴゲーム開催
→メディア掲載　2025年9月19日、23日
福井新聞／FBC NEWS NNN（福井放送）／福井テレビ
・ゆるキャラ原案の作成
・４名の卒業研究の執筆と報告「福井三里浜オリーブ地域活性化プロジェクト2025」
ーオリーブ収穫体験・研修会の実施と今後の課題ー
ーオリーブに込められた希望の光:食料資源の発掘ー
ー持続可能な環境にやさしいオリーブの発信手法と実践ー
ー三里浜オリーブカルメリーナから福井のブランディングへー

KYORITSU_OLIVE

実施報告書

◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	・連携先の福井市、三里浜オリーブ合同会社とは2024年度春からオンライン会議を積み重ね、文献収集・精読作業により目標設定の機会を提供してきた。2024年10月収穫祭イベント参加は課題発見の絶好の機会となった。 ・「共立リーダーシップ」が目指す、個人の持てる力を発揮して他者と協働して目標を達成するべく、4年生は魅力発信と人手不足という共通課題に対し、各自の考える課題解決案を提示するという目標を設定した。3年生は個別の課題発見を主としながら、グループで行える課題解決案とその実践を目指した。
協働活動	・演習にてオンライン会議、メールによる情報共有、2度の福井訪問により福井関係者との協働関係を形成した。4年生はイベントでの商品販売促進、研修会、収穫祭の企画・実践という３つの協働活動にに取り組んだ。3年生は、演習内でのグループ作業や3,4年生合同ゼミを通じて共通認識を図る機会を得た。その結果、商品促進販売のためのポップ・パンフレット作製のほか、ゆるキャラ作成という協働活動を新たに展開した。 ・国際協力とNPO履修生は、3回のワークショップで能登の食資源を用いた地域創生について課題解決案を作成、生成AIアプリで表現する協働学修を行った。
共立リーダーシップの観点での振り返り	・演習では、グループ作業のファシリテーターと書記の設定、事後に作業の振り返りと次回までの課題、次の作業計画をグループで共有するgoogle chatに記入することを促した。 ・前期・後期の演習最終回に全体の振り返りをし、次段階の活動課題を見出した。 ・演習3年生は、次年度の卒業研究に向けた個別テーマを策定した。演習4年生は、連携先に向け卒業研究最終報告会を行い、各自の活動の振り返りをする機会とした。 ・国際協力とNPO履修生は、ワークショップによる学びを期末レポートにまとめ、授業最終回で協働作業を振り返った。

◆ 学生の成長に関する総括

・演習授業内にてグループ作業の時間を設定し、都度の意識づけ、計画策定を教員が促した。4年生は協働活動と個人研究を並行して行う難しさを感じていた。個別テーマの研究と執筆を進めるなか、協働活動では目標設定と共有が当初進まなかった。3年生においては、オリーブ農園の訪問経験のないなか、加工品の試食試飲や情報収集のみで十分に魅力を理解できないまま販売促進をすることの難しさが露呈した。
・9月の研修会、10月の収穫祭の企画を進めるにつれ、当事者としての自主的な活動がみられるようになった。特に3年生は9月研修会の参加を通じ、10月の収穫祭における自分たちの役割を見出し、ゆるキャラ作成という新たな活動の意義を発見し、自発的な活動が進んだ。4年生は卒業研究の執筆を通じ、自分の行動が連携先のどのような課題とその解決に繋がるかを認識し、その成果を明らかにした。

◆ 取組みを通した全体の所感

・学生の主体的な取組みを促すには、自ら関与できる機会提供が必要である。福井関係者との定期的なオンラインミーティング、メールでのやり取り、グループ作業などで促したが、現地訪問が学生たちの気づきと学びに最も効果的であった。
・オリーブ収穫と加工品生成が9－11月に集中しており、4月から開始する学事歴を踏まえると、プロジェクト対象の特性によって大学生が継続的に関わるための具体的目標と計画の策定には、教員による誘導も相当程度必要である。学生のリーダーシップを促進させるには、どのような協働活動に関わるかの緻密な制度設計が求められると考える。
・現地訪問後の3年生の新たな協働活動の提案と実践は学生自らのイニシアティブとして評価できる。また4年生は、3年次から課題発見から課題解決案の設定と実施、福井関係者への報告を通じ、他者と協働できた自負が生まれた。実践のみならず研究執筆によって活動結果の分析と理解、今後への示唆が深まった。

◆ 今後の展開

・2026年度はゆるキャラの確定をもとに魅力発信の戦略性を深めた解決案を策定・実践する。オリーブオイルの食べ方・飲み方の小冊子作成、関心喚起の効果測定、収穫体験を核とした三里浜ブランディング、持続的なオリーブ加工と食品ロス削減の可能性を各学生の個別テーマとして設定する。
・協働活動は、SNSの戦略的運用とHPにおける記事公開を予定。

この報告書に加え、別途、教職員向け、学生向けのアンケートを実施させていただきます。